NOTICE サポセンからのお知らせ

市民活動を「体験」する時間 ちょっと。ボランティア

日　時：3月26日（土）午前10時～12時

内　容：地域や社会のために何かしたいけれど、「何ができるかわからない」「何からはじめていいのかわからない」。そんな方におススメです。今回のボランティア活動は、水害で被災した写真の洗浄作業です。ボランティア先は、特定非営利活動法人おもいでかえる。復興・復旧に向け、被災者の心を支える活動を体験してみませんか。

場　所：仙台市若林区六丁の目元町13番20号　元町ＨＴビル201号室
定　員：5名（定員になりしだい締切り）
参加費：無料
申込み・問い合せ：仙台市市民活動サポートセンター
TEL 022-212-3010　FAX 022-268-4042　Mail sendai@sapo-sen.jp
メールでお申込の方は、件名を「体験する時間」として、お名前・ご所属・連絡先・参加人数をお知らせください。

マチノワ・ラボせんだい 協働から創発へ～これからの地域や社会づくりを考える～

日　時：3月22日（火）午後6時～午後8時30分

内　容：サポセンでは協働によるまちづくりを推進するための調査研究を始めました。研究の第一歩となる今年度は、全国の先進事例調査と仙台市の市民活動支援策の基礎調査を、専門的視点を持つ団体、一般社団法人パーソナルサポートセンター、NPO法人都市デザインワークスと協力して実施しました。
今回は、調査で得た全国の事例等の報告とともに、横浜市で多様な主体による課題解決に取り組むオープンイノベーションを推進する関口昌幸さんをお招きします。仙台におけるこれからの地域づくりや社会づくりの手法について考えます。

「マチノワ・ラボせんだい」ってなに？
市民一人ひとりの知恵や経験を持ち寄り、仙台におけるこれからの地域づくりや社会づくりを考え、実践の準備をするための広場です。
今後、まちづくり事例の紹介や調査報告等を材料に、継続して開催する予定です。

場　所：仙台市市民活動サポートセンター　市民活動シアター
ディスカッションゲスト：関口昌幸（横浜市政策局政策部政策課担当係長）
ファシリテーショングラフィック：稲村理紗（まちづくりファシリテーター／ＮＰＯ法人あきたＮＰＯコアセンター理事）
報告者：菅野　拓（一般社団法人パーソナルサポートセンター）
　　佐藤 芳治（NPO 法人都市デザインワークス）
　　菊地　竜生（仙台市市民活動サポートセンター）
定　員：30 名
参加費：無料
対　象：地域課題の解決に取組む市民・企業・行政。セクターの壁を超えて課題解決やまちづくりに取組みたい方など
申込み・問い合せ：仙台市市民活動サポートセンター
TEL 022-212-3010　FAX 022-268-4042　Mail sendai@sapo-sen.jp
メールでお申込の方は、件名を「マチノワ・ラボ」として、お名前・ご所属・連絡先・参加人数をお知らせください。

つながる つなげる サポセン

仙台市市民活動サポートセンターとは
様々な分野の市民活動団体やNPO、ボランティアなど、非営利で公益的な活動をしている人たちや、これから活動しようと考えている人たちの拠点施設です。

このようなご相談おまかせください。
●市民活動の立ち上げ、法人格の取得、団体運営、組織運営などの相談
●協働についての相談
●復興支援活動、シニア活動・セカンドライフなどの相談

今月の休館日 ：3月9日（水）・3月23日（水）

今月の表紙
月1回、ぱれっとの編集会議に集う学生たち。東日本大震災から5年が経とうとする今、自分たちにできることは何か。学生たちの思いとともに、震災の記憶が引き継がれていきます。

●情報ボランティア@仙台
https://kacco.kahoku.co.jp/author/volunteer16

開館時間　月曜日 ― 土曜日 9:00-22:00　日曜日・祝日 9:00-18:00 ／休館日　毎月第2・第4水曜日（祝日の場合は翌日木曜日）年末年始

HP　http://www.sapo-sen.jp
Blog　http://blog.canpan.info/fukkou/
Twitter　@sensapo

「ぱれっと」バックナンバーはホームページからダウンロードできます。

▶ぱれっと読者アンケートにご協力お願いします。
サポセンホームページからアクセスいただくか、携帯電話等でQRコードを読み取ってご利用ください。

発行　仙台市市民活動サポートセンター
〒980-0811　仙台市青葉区一番町四丁目1-3
TEL 022-212-3010　FAX 022-268-4042
地下鉄南北線「広瀬通駅」西5番出口すぐ
発行日　2016年3月1日
編集　特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター
デザイン　PEACE Inc.
編集人　菊地 竜生　太田 貴　菅野 祥子　葛西 淳子　松村 翔子

仙台市市民活動サポートセンターは、特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンターが仙台市の指定管理者として、管理運営を行っています。［指定管理期間2015年4年1日～2020年3月31日］

ぱれっと3

仙台市市民活動サポートセンター通信 ぱれっと 2016 No.199

“ぱれっと”には、サポセンにいろいろな人が集まり、それぞれの色（個性）が発揮され、新しい出会いや活動が生まれていく。そんな願いがこめられています。

今月のワクワクビト

取材を重ね「新たな自分」を築く

情報ボランティア@仙台 代表
小林 奈央さん
NAO KOBAYASHI

震災復興の実情や市民活動に携わる人々を取材し発信している「情報ボランティア@仙台」の代表小林奈央さん（22）には、高校時代からの夢がありました。「自分の記事で読者の暮らしや人生にいい影響を与えたい」。願いを胸に2012年冬、大学1年生のときに情報ボランティアの一員になりました。
当初は「初対面の人と会うのが苦手で、震災についても話をなかなか引き出せなかった」と振り返ります。被災者への取材を重ねるうちに「相手とも、その人の震災体験とも、きちんと向き合おう」と意識が変化。意欲的に活動に励み、県内外の学生ら約25人が加わる団体を率いるまでになりました。
昨年、仙台市で開催された国連防災世界会議では、防災に取り組む市民団体を取材。「震災を風化させないためにも、取材して記録に残すことが私たちの役割」と自覚が深まりました。
「人が好きだから学生記者を続けられた」と小林さん。4月からは新社会人。多くの学びと感謝を胸に、仙台で人と接する仕事の前線に立ちます。
取材・文：安藤 綾香（市民ライター）

情報ボランティア@仙台
連絡先　Blog　https://kacco.kahoku.co.jp/author/volunteer16
Facebook　https://ja-jp.facebook.com/jyoho.volunteer.sendai
Twitter　https://twitter.com/vooochan
震災直後、報道は被害の大きかった三陸沿岸に集中しました。結果として手薄となった仙台圏の発信を、地元の大学生がブログを駆使して担ったのが活動の原点です。取材・執筆のノウハウは、今も添削指導を受ける河北新報社の協力で学びました。昨年の国連防災世界会議では、テーマ館となったサポセンの様子を連日取材。昨夏からは、「ぱれっと」の表紙の執筆を担当するなど活躍の場を広げています。ブログは随時更新中！ 興味ある方は上記連絡先まで。

特集
荒浜にファンをふやし、
再び人が集まれる場所へ
3.11 オモイデツアー

特集 荒浜にファンをふやし、再び人が集まれる場所へ　3.11オモイデツアー

東日本大震災から5年。仙台市沿岸部に位置する若林区荒浜地区は、災害危険区域となり、もう家を建て、暮らすことができません。荒浜のまちの記憶を記録し、再び人が集える場所にしようと活動している人たちがいます。NPO法人20世紀アーカイブ仙台と、地元で活動する荒浜再生を願う会、海辺の図書館です。3者が連携して取り組む「3.11オモイデツアー」を紹介します。

荒浜再生を願う会
貴田喜一（きだ きいち）さん

×

海辺の図書館
庄子隆弘（しょうじ たかひろ）さん

×

NPO法人
20世紀アーカイブ仙台
佐藤正実（さとう まさみ）さん

荒浜の今と昔に触れる滞在型ツアー

被災地である若林区荒浜地区を舞台に、まち歩きや昭和の写真を見て楽しむツアーがあります。昨年12月13日に実施した「3.11オモイデツアー」です。地元の人だけでなく、県内外はもとより、遠くは九州熊本から37人が参加しました。

ツアーは、海岸のごみ拾いから始まります。普段から海岸の清掃活動に励む地域団体、荒浜再生を願う会の貴田喜一さんは言います。「かつて荒浜にあった深沼海水浴場を復元させ、人の賑わいを取り戻したい」。荒浜散策のガイドを務めるのは、荒浜の住民だった庄子隆弘さんです。2014年6月から荒浜地区を拠点に、海辺の図書館という学びの場づくりを始めました。被災地の今を見て回りながら昔の荒浜の話をしたり、震災の経験を話したり、思い出と備えの大切さを伝えます。

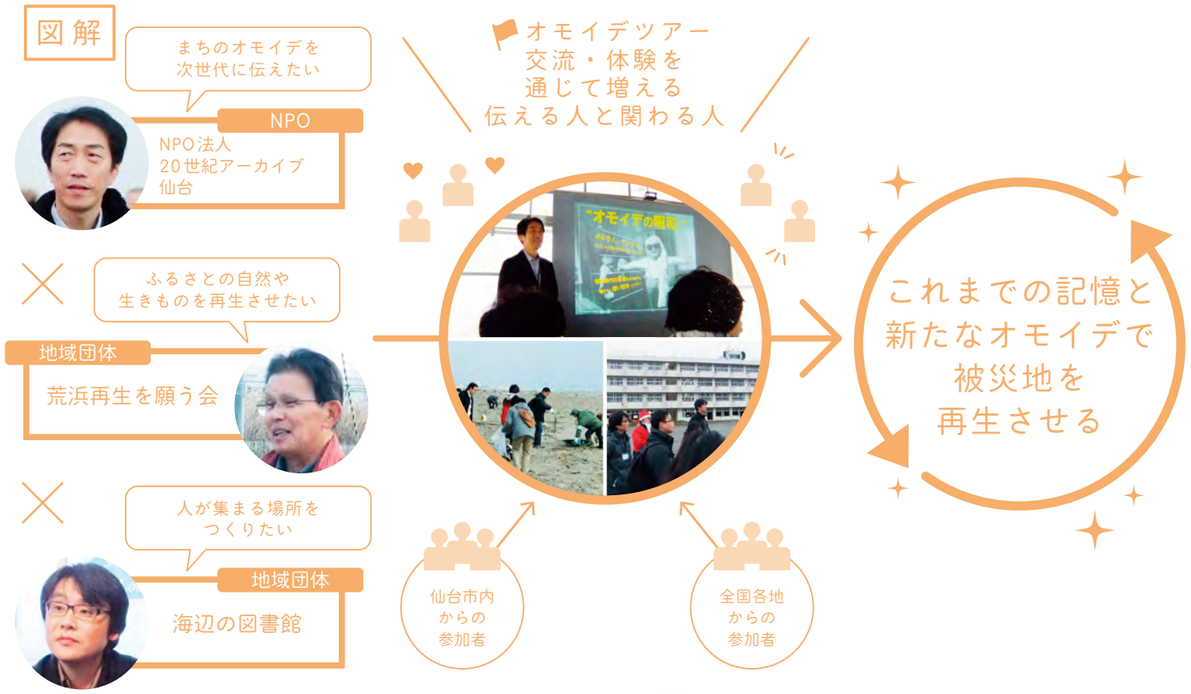
昼食には、荒浜再生を願う会が、参加者につきたてのお餅や豚汁、ピザなどを振舞います。この「お振舞い」は、仲間になった証。活動に参加した方への感謝の思いを込めています。

20世紀アーカイブ仙台の佐藤さんは、昔の荒浜の写真を見て地元の人が思い出を語る会を企画しています。「震災前の荒浜の写真を見てもらうことで、以前の荒浜特有の生業や生活習慣、人々の営みなどをイメージしてもらいたい」と、ツアー参加者に荒浜の魅力を伝えます。

被災沿岸部と市内中心部の多様な視点を融合

ツアーは、仙台市震災メモリアル・市民協働プロジェクト「伝える学校」の一環として開催。震災における経験や記録を市民一人ひとりが語り伝えていこうという取り組みです。普段は市内中央部で活動することが多い佐藤さんと、震災後、地元で活動を続けてきた貴田さん、庄子さんたちが協力してツアーの企画を練ってきました。

貴田さんは、「当時は、現地再建への思いばかりが先行していた」とふりかえります。「他団体と一緒に活動していくうちに、互いに意見や提案を出し合いながら、ふるさとの再生を進めることが大切なんだ」と気が付いたと言います。「単独ではできなかったことが、3者が持ち味を生かし、協力し合うことで形になることを学んだ」と、庄子さんは今回の成果に満足し、今後の連携継続に期待を込めます。佐藤さんは、「ひとつの団体のアイディアだけでは一方的になってしまう。沿岸部で活動する2つの団体との協働で、地元の団体の考えを取り入れたプログラムを作ることができた」と一緒に活動することの意味を語ります。



■連絡先
●海辺の図書館
TEL 080-1019-3631　Mail info@umibe.org　HP http://umibe.org/
●荒浜再生を願う会
〒984-0033仙台市若林区荒浜字中丁27
TEL 022-390-0601　Mail arahama.reborn@gmail.com
●NPO法人20世紀アーカイブ仙台
〒983-0021　仙台市宮城野区田子1丁目11-2
TEL 022-387-0656　Mail info@sendai-city.net　HP http://20thcas.or.jp/

荒浜を再び人が集まれる場所へ

「ふるさと荒浜の豊かな自然や生き物を再生したい」と貴田さん。「人が集まれる場所をつくりたい」と庄子さん。さらに佐藤さんは、「荒浜のファンをもっと増やしたい」と語ります。普段はそれぞれ異なる場所で活動をしている3者ですが、「訪れた人に荒浜の魅力を知ってもらいたい」とツアーにかける思いは同じです。失われてしまったからこそ、大切な宝物だと気付いた「まちのオモイデ」。それを多くの人に伝えるツアーは、新たなオモイデや関わりを生み出します。「この取り組みを荒浜から同じ被災地である宮城野区蒲生や名取市閖上へと広げていきたい」と、思いは膨らみます。

（取材・文　新田裕一郎）

ここチェック

失われたふるさとを次世代に伝えたい「中野ふるさと学校」

仙台市宮城野区中野地区は、震災後、災害危険区域に指定され、居住が制限されています。中野ふるさと学校は、地元の住民有志が集まり、中野地区4町内会（港、蒲生、西原、和田）の思い出や歴史を後世に伝え、再びみんなで集える場所を作りたいと活動しています。
2015年度は、震災前の地元の姿を再現する立体地図模型作りに挑戦しました。出来上がった模型を囲みながら思い出を語り合うことで、住民が集まるきっかけとなり、お互いの交流につながることを期待しています。2016年度も地域のシンボルである「日本一低い日和山」の山開き登山などを予定しています。随時「中野ふるさと学校」への参加者も募集しています。
●お問い合せ　仙台市高砂市民センター　TEL 022-258-1010

お役立ち本

『<つながる／つながらない>の社会学』

編者：長田攻一・田所承己／発行：弘文堂

「つながり」という言葉をよく耳にします。無縁社会や既存コミュニティの衰退からネットワークの重要性が説かれる一方、他人とのコミュニケーションが苦手で必要以上につながろうとしない場合もあります。そもそも「つながり」とは、何でしょうか？本書は、「つながり」についてインターネット・コミュニケーション、コミュニティカフェ、協同組合等の視点から読み解きます。

コトハジメ

公益財団法人 ベルマーク教育助成財団
ベルマーク集めるだけで参加できるボランティア

ベルマーク運動は、「すべての子どもに等しく、豊かな環境のなかで教育を受けさせたい」という願いで1960年から始まりました。集められた資金は、全国の学校の教育設備や教材を揃えるために活用されます。学校PTAと公民館や大学で収集することが基本ですが、個人でも、近くの参加学校へ寄付するか、ベルマーク教育助成財団へ送ることで参加することができます。
https://www.bellmark.or.jp/

▲問合せ先
〒104-0045 東京都中央区築地5-4-18
汐留イーストサイドビル7階
TEL 03-5148-7255

インフォメーション

市民メディアの担い手育成
人と人、人と街をつなぎ、ローカルから新たな出会いを生み出す

2015年、サポセンでは5月～7月にかけて市民ライター講座を開催しました。受講者はのべ28人。講座終了後、有志がチームを組み、市民ライターとして街に飛び出し活動を始めました。地域で活躍する人の話しを聞いて紹介したり、まちの魅力を発掘して記事を書いたり。情報発信することのおもしろさを体感しています。活動をするなかで、地域に愛着が芽生え、地域の様々な課題にも関心を持つようになりました。自ら情報発信することで、仙台のまちづくりにどのような影響をもたらすのか、その可能性は無限大。これから市民ライターの活躍が期待されます。
サポセンでは、引き続き2016年も市民ライター講座を開催予定です。伝える力を高め、「地域のために何かしたい」と考えている方を応援していきます。

▲市民ライター講座の様子